勝善寺仏像調査報告

伊藤祖孝（市史編さん専門委員）
秋山　敬（市史編さん専門委員）

釈迦如来坐像及び夢窓国師坐像について

はじめに

民俗・美術工芸部会では、昨年六月に市内に存する社寺に対し、建築及び彫刻についてのアンケート調査を行い、これに基づいて現地での確認調査（予備調査）を実施してきた。調査件数はすでに八〇件に及ぶが、その中で特筆すべきものとして、勝善寺蔵の木造釈迦如来坐像及び木造夢窓国師坐像の発見がある。これは、本年五月二四日の予備調査の段階で存在が確認されたもので、七月一八日に事務局職員とともに写真撮影・計測等を行った。その際、釈迦如来坐像の胎内より多量の銘文が発見されたため、八月九日に至って、磯貝正義・中沢信吉・秋山敬各委員（以上、考古・古代・中世部会）、服部治則委員（民俗・美術工芸部会）、及び事務局の応援を得て再度調査を行い、銘文の筆写を終了することができた。

本稿は、この二体の坐像について、美術・工芸的見地から調査結果の概略を報告するものである。なお、釈迦如来坐像胎内銘文については、秋山委員に執筆を委ねた。

一　木造釈迦如来坐像

当寺の本尊釈迦如来坐像は木造寄木造、玉眼入りで全身金箔を施した仏像である。全長六〇cm、面長一四cm、面巾一二・一cm、肩巾三四・五cm、膝張り五二cmで、それほど大きなものではない。

本像の尊顔は、やや目が鋭く、大きく見開いている。また、面長のせいか相貌端厳または仏相円満というにはあたらず、何か人間くさい感じがする。螺髪も大粒で彫りが浅く、少々鉢もひらく。しか

しその体軀、及びそれを覆う衲衣の深いくねったような曲線は、すでに県指定となっている棲雲寺の釈迦坐像（文和二年、一三五三）、同じく県指定の深向院釈迦坐像（至徳二年、一三八五）、甲府市指定法泉寺釈迦坐像等とほとんど同じ様式を持ち、一見して南北朝時代の仏像であることがわかる。これらの手法は、大体鎌倉時代後期から発生し、南北朝から室町時代にかけて多く造像せられ、地域的には京都や奈良のような中央ではなく、主として鎌倉を中心として関東地方に多いものと思われる。

以上のような事情は、時の政治や仏教文化の流れによる仏像彫刻や仏師達の盛衰変化に関係するところが多い。即ち政治面では、頼朝が京都一辺倒をさけ鎌倉に幕府を設けて新生面をひらき、仏教文化においては、平安時代までの祈禱主義による仏像崇拝から、人間の生き方に重点を置く禅宗が勃興し、仏像（如来や菩薩像）を軽視して祖師の肖像彫刻や仁王像のような天部像が、盛んとなってきた。従って仏師たちの動きも、これによって支配され、運慶を軸とする慶派は京都・奈良にあってなお、仏像や肖像彫刻に優れた手腕を発揮していたが、その他の院派や円派の仏師たちやその末流は、各地方に分散し、または定着して、それぞれの作品を残したようである。

右のような諸点から考えてみると、本仏像も、地方作と思われる条件がそろっているように考えられる。第一に尊顔が都ぶりの優美な作風から遠いこと、第二に深向院釈迦坐像とその体軀の彫り方がすべて同一であることで、これを全く証明するごとく、実は本像の胎内に、約二千字ほどかかれた墨書銘によってそれを知り得たのである。その最も有力な手がかりとなる造像年代と、仏師名がみられたことは本仏像の誠に幸いなところであった。

銘に曰く「嘉慶元季南呂十九日、大仏師増光」とあり、嘉慶元年は、北朝の年号で一三八七年にあたり、南北朝時代の末期、室町時代に移らんとする時である。又大仏師増光は、前記した深向院の釈迦坐像の銘にみられる、大仏師越後阿闍梨増光と同一人と思われるのである。越後阿闍梨を名乗るところをみると、京仏師ではなく、越後出身の地方仏師であると推定される。次になお本仏像銘「住持比丘中津　現住京師等持寺」によると、かつて恵林寺に住した当時の名僧、絶海中津が関係しているようである。即ち彼は、康暦二年（一三八〇）から永徳三年（一三八三）鹿苑院に移るまで、約二―三年間恵林寺に住したが、おそらくその間に本像の造立事業がおこり、胎内にぎっしりかかれた一般民衆（寄附者）へよびかけ、具体的に勧進をはじめたのは、おそらく嘉慶元年になってからと推察される。銘にあった嘉慶元年の完成時には、すでに中津は京都等持寺に移っていたので、このような銘をかいたものであろう。なお次の銘文「当寺ハ自ヲ革メテ教院ヲ為スニ禅刹ト一以来已ニ向ヲ二四十季一仏殿本ト安ズニ無量寿仏立像ヲ一」によると、もと勝善寺は、禅宗以外の寺で、おそらく無量寿仏即ち阿弥陀如来を祀っていたようなので、浄土宗ではなかったかと思われる。それが、もし嘉慶前後を起算として四〇年をすぎたとすれば、貞和年間に禅宗に転向したことになる。貞和といえば夢窓国師の晩年近く、天竜寺を開山してその名声が最も高かった時代である。本県においては、幼児時代をすごされ、恵林寺なども開創されていたので、本寺の禅宗に転宗する際、おそらく寺伝による夢窓国師開山は、招請開山としてではなかったかと推察される（以上磯貝正義先生の御教示による）。

以上の通り本像に関して概略をのべたが、結論としては美術的な価値よりも、深向院の仏像と同じく制作年代及び仏師名があることと、奉安者の中に名僧中津や一般寄附者の戒名・俗名などが明記され、その郷土史的資料価値が大変高いという点では、今回の甲府市史研究の上からも、誠に貴重な仏像ということができよう。

二　木造夢窓国師坐像

さて本像については、さきに触れたように、寺伝による開山像であり、本寺本尊である前掲の釈迦如来坐像の銘によって、浄土宗から禅宗に転じた時、あるいはそれ以後本尊釈迦坐像造立の前後に造られたかとも考えられる。本像の高さは、全長（頭上から衣の裾まで）一一二cm、坐高七八・〇cm、面長約二一cm、面巾一四・七cmで、倚子の上に結跏趺坐しておわす。これも鎌倉時代以後の肖像彫刻において特に禅宗僧侶に多くみられる形である。本県には既に夢窓国師の肖像彫刻は、重要文化財の古長禅寺（甲西町）夢窓国師像と、県指定の恵林寺夢窓国師像があり、本像を加えると三体の国師像が存在する。これは他県に比して何か多いような感じもするが、鎌倉や京都にもすぐれた国師像があり、今回本像が発見されたことから他にも未見の国師像がまだあるかもしれないと思われる。

さてそれはとにかくとして本像は、ほぼ等身大で寄木造玉眼入り、うす青の襟元に黒色の衣と袈裟を着しているが、腕や膝頭の盛り上りが誠に写実的で、さわればほんのりとした暖かさを覚えるようである。お顔も夢窓国師の特徴かと思われる面長で鼻下が少し長く拝される。衣文のきざみ方は、どちらかといえば鎌倉瑞泉寺の国師像より、延文二年（一三五七）の銘をもつ古長禅寺の国師像に近い。どちらが前後するかは軽々に論じられないが、両方ともなで肩でその衣のきざみ方は直線的で、写実的な鎌倉時代初期の手法からみると、大きく形式的に類型化している。あいにく本像にはどこにも年号はみあたらず、僅かに梵字と「般若波羅密多〇〇〇（不明）」の墨書銘がみられるだけであった。一方の釈迦如来坐像は沢山な墨書銘と年号がみられるので、なんとか関連する銘はないものかと胎内をさがしたが、現状では到頭発見できなかった。なお本像は、昭和に入ってから勝善寺関係者らの手によって、ぬりかえされたということで、いたく尊顔や像全体の印象を損じており、個性的な夢窓国師の像容はしっかりと表現されているが、彫刻としての価値を幾分弱めている。

ちなみに、夢窓国師は、幼少時代を甲斐に育ち、長じて二〇歳の折建仁寺の無隠円範の門に入り禅をおさめたが、後一山一寧について学び、なお高峰顕日のきびしい薫陶をうけて悟脱。最初美濃に虎溪庵を営み、のち土佐の国に吸江庵、相模の泊船庵などにかくれていたが、後醍醐天皇の懇請によって始めて京都南禅寺に住した。以後次々と鎌倉の浄智寺・瑞泉寺・円覚寺などを歴住して後、元徳二

年（一三三〇）ついに甲斐に恵林寺を創立した。時に夢窓五五歳。その外にも本県においては、さきの古長禅寺を始めとし清白寺・法泉寺・安国寺などの招請開山とせられているので、本寺もそのうちの一ケ寺にかぞえられるものではなかろうか。とすれば夢窓国師坐像の現存することは、他寺から動坐しないかぎり誠に有力な証拠物件となり得る。

さて以上によって、勝善寺の木造釈迦如来坐像及び木造夢窓国師坐像の緊急調査に関して、私見をのべたが、なお一層今後の研究調査を待つことにしたい。

（伊藤）

木造釈迦如来坐像の胎内墨書銘について

はじめに

事務局から胎内に長文の銘をもつ仏像が発見されたとの連絡をうけ、調査の機会を与えられたのが昭和六〇年八月九日のことであった。

その仏像は、甲府市後屋町の勝善寺に本尊として安置される釈迦如来の坐像である。坐高が一メートルに足らない小像であるが、その内側のほぼ全面にわたって墨書文字が書き込まれている。このような長文の胎内銘をもつ仏像は、県内では他に確認されておらず、全国的にもそう類例があるとも思われない珍しいものである。今回は時間的余裕と筆者の能力から内容の検討にまでは十分立入ることができなかったが、それについては後日を期すこととし、ここではとりあえず銘文の概要を紹介して、調査に携わった者としての責を果したい。

一

まず、墨書銘の全文を紹介しよう。

(A)

彼阿道佛明阿現□
信安親行智阿是阿皆阿縁阿
性密性専名阿性阿性阿常珎浄愁理満
妙貞性圓松□妙志犬子妙子善阿慧倫
明献浄貞妙性□妙閑超阿
理仁智音道常性中性孝性縁性妙
御菴是圭理音禅聡妙□理香法阿香阿
昌玄道摩徳犬言母性(因)曰是三梵鉄妙皆理本
是珎如真専阿梵(鐵)鑊楞慶道義常真中金
高俊妙空慶父周高義雲妙三勝子亀子
龍子道昌妙上是真七郎性婆聖阿弥次郎
満女浄徳姑女婦女道鎮性信小次郎勝女
本好道泰昌卜明香真了妙清
明真妙元道観具阿宗秀令(魁)魁
中南道重性哀常阿性文
道誓道圓昌勝中端梵守
周光梵逸性端中禅常貞
道順常崇春宗西阿
岩女真教梅女熊若祐仁
法名昌妙真教性秀
信及常仁仙阿(定)定阿縁阿
阿定

浄本孫次郎

(B)

妙玄永道空道法妙縁浄可
了縁女妙性阿了法性心理咸理香浄印性妙
石殿理明大夫四郎大夫次郎正禅性猷之立
若性　彦太郎道先性高幸次郎良□(阿カ)
道秀足女又犬寂圓七郎次郎性□(阿カ)
左衛門次郎孫三郎彌三妙心道祐法心彦四郎
若一六郎三郎又次郎六郎又三郎賛阿彦五郎
四郎彦太郎四郎五郎道賢次郎四郎次郎犬女□
道聖孫五郎孫七又四郎四郎三郎孫七孫三□(七カ)
妙縁與三慶祐祖光孫八孫□
九郎次郎五郎三郎太郎四郎三郎士郎
孫七六郎孫四郎五郎次郎聖法弥次郎聖密松女
藥師宮鶴亀石道心法縁若菈(浮カ)処(恩)恩阿護利
平三郎道聖仁道智教孫次郎虎女聖縁
一房五郎次郎夜叉女四郎三郎勝女
四郎次郎　道性慶譽四郎五郎了恩
左近次郎浄久法寂

(C)

真照性妙寶鬼法喜理猷孟妙應道貞性法三郎了
道性阿浄金阿庫三郎五郎「太郎」太郎母土用房太郎理
俊善山性景明性性春性金観性虎犬慈芳聖忍看
阿

(D)

観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見
五蘊皆空度一切苦厄舎利子色不異空空不
□(異)色色即是空空即是色受(受)想行識亦復如是
舎利子是諸法空相不生不滅不垢不浄不増不減
□(是)故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意
□(無)色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無
□(明)亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅
道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波
羅蜜多故心無罣碍無罣碍故無有恐怖遠離一切顚倒
□(夢想究)想□意涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿
耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神咒是
大明咒是無上咒是無等等咒能除一切苦眞實不虛
故説般若波羅蜜多咒即説咒曰

(E)

揭諦揭諦波羅
揭諦波羅僧揭諦
菩提薩婆訶
已上顯密般若毎
字燒香三拜書
之(定)專祈
乾(乾)坤道泰朝野
民安伽藍鎮静
禅道興隆修
行有慶進道
無魔者也

(F)

□母

窪女太郎三郎法阿

弥勒女徳阿上巻近阿彦殊真永小五□(郎)

理明理恵理見真宗性理善安寶受　仙妻楠犬亭

性山　了空次郎太郎性海犬子松女孫次郎彦八四□(郎)

用

禅　徳　理勝慧精真回眞隆真□仙祥明省道聖　浄本如元道清内方性光四郎祐説智

浄　五郎次郎宮一老尼道永性久

四郎太郎又三郎妙金又次郎七郎専阿　蝴蝶揚梅助浄光小五郎性登榮宗佐阿常生

河邊殿祖清宗春道周理一理訢(訴)知見知善欄女理泰理照理徳理秋理方道斉

心空本阿如阿妙光昭阿妙観了阿又三郎

道珎道男道弘周穏是雄性喜浄偏性珎業鏡良訓明稟仁立妙説禅理浄省

道悟立源宗般浄縁道般昌俊性阿道斉通光宗恵宗忍昌忍浄一智善善阿松王一亀房重松子名阿覺阿

悟心智妙素清素祐尼勝宮又次郎音箱中憐説智妙勝浄通祐光性寛妙空言説常用是呈慶義

(G)

楠拾楠犬犬子智阿浄源道香順智道堯昌門

善行善徳観命観後観中道恩浄珎祐真乗空明海昌圓妙善禅能妙阿

彦七道琢四郎左近五郎法寂道元妙禅孫八永徳孫六道槃妙禅道空道昭道通妙了

凡　銕

道中理高隣照道珎正心妙光妙意知等圓密支琳道吉覺禅明宗道秀道満浄光聖心道妙

□

□

□

□

(H)

當寺自革教院為禅刹以来已向四十季佛殿本安無量壽

佛立像近歳殿屋甥欝攸之變(変)□像僅雖存十之四五

散失矣嘉慶丁卯比丘周亮罄誠持疏(疏)普化比丘比丘尼
優婆塞優婆夷宰官婦女童男童女等名(名)工於瑞雲
菴造設　釋迦如来坐(坐)像以代彼立像意在霊山一會儼
然未散旷願能化所化坐立儼然全無古今之異法輪食
輪運轉自如長絶魔外之障随而盡記施者名字於體
中以為當當来母之種子其甲乙不必論多寡大小貴賤老
幼道俗男女随旷註先後誌之多要莫過一緡少不骨遺四字品目繁
多不能枚擧　仰冀昭鑑

(I)

真智□□芳□□真性悟□□□
周迪親廣理浄常宗中蘭玉五郎
理秀理秋明貞理俊理真理□

住持比丘中津現住京師
等持寺

看院比丘梵一
幹縁比丘周亮　理晋
大佛師　増光
嘉慶元季南呂十九日

(J)

中津中渕梵一周亮昌□(勇カ)中琢雲昭乾授中堅中璞梵玖中専梵星乾貞甲訓慧湛慧善乾順等王梵固周慶梵
梵從中琱梵茂中英梵盌首麟梵華甲謙甲教中越周琅昌敦中清梵楞祐信等聞□道四梵倫周祐中良道
□□中孝中夾(爻)中隆梵玉中察梵昌芳俊首栢中善昌瑞妙鎮中詮昌猷昌果梵利梵鑑中珀周□□周要梵□

(K)

弥弥法光頼武満春□□□妙順□(妙カ)正善空□法内方常宗東房次郎太郎妙巽(乾カ)中全理□

浄光寺慶光瑞英理文妙春理徳了關泉利同女理昭理育中西常香聖□(鋭カ)妙立貞阿阿
常友正仁聖光性遼理明道照秀貞常喜真玖性薫理真性安悲阿道圓浄空
性能道忍常穏祐宗常秀法雲孫四郎

(L)

追善三郎五郎四郎三郎宗観次郎太郎成阿次郎三郎妙道妙圓了珎俊香道通性俊落葉女荒野女亀女
美濃女梅女満阿性端五郎次郎本猷一宮楠女姫麻楠女花裳同子覺心松野自心能房楠房松女
千手房勝房妙一彦三明一秋野妙恩理一妙心結女地蔵女道阿雙親姫犬妙一知久如心松女如濕
□(小)三郎妙閑妙真小太郎母大夫五郎真英三郎次郎妙仙四郎三郎道詮行音与五郎太郎三郎妙珎
鶴女心匣王孫太郎五郎太郎四郎五郎妙周聖雲　里春太郎道秀専阿尼女寅女乙石松子夕霧浄妙
五郎三郎彦三八郎四郎老婆
楠子　松子孝阿明阿明隆忍法孫三郎駒一弥太郎平三六郎二郎　太郎五郎道秀五郎太郎松犬性恵小菊兵衛四郎
福子理妙本巣珎智故阿性意伊□郎三郎七郎五郎三郎　彦太徳女千代松性雲太郎母亀楠北殿別当尼母
七郎次郎彦六楠次郎開阿見阿四郎次郎傳母
彦四郎妻六郎次郎彦四郎五郎次郎徳阿六郎次郎

以上が勝善寺釈迦如来像の二二〇六字以上(1)にわたる胎内墨書銘の全容である。この像は寄木造であるが、現在は大腿部と軀幹部との接合部分で前後二つに分れているので、そこから胎内銘を確認することができる。文字は胎内の不整形の面を利用して記されているため、行間や文字の大きさ、また各行毎の字数等もまちまちで正確な表示はし難いが、一応各行の書出し部分を実際の墨書位置にほぼあわせて表記しておいた。

さて、銘文の表記位置を示そう。まず、(A)〜(C)は大腿部にあるものである。(A)は左膝裏に、(B)はその反対側の右膝裏に書かれている。(C)は、(A)と(B)よりも更に底面に近い位置にあり、(A)から(B)の方向に向って一行で記されている。「太郎」はその(C)の文に対して、縁辺部からほぼ直角に接するような形で描かれている。

(D)以降は軀幹部に書かれたものである。(D)は腹部裏面にあって、(E)はその下に位置する。(F)は(E)の文章の左に引き続いてあり、左側面裏に相当する。(G)は背面裏にあり、最後の三行は読んでいない。三行のうち、前一行と後二行との間が寄木の貼り合わせ部分になっており、接合に用いられた布と膠(にかわ)のところに重なりあっていて文字の判読がしにくかったため、時間の関係で今回の調査での判読はあきらめた。内容的にはその前四行と同様に人名が列記されたところである。(H)は(G)に続いて背面裏中央にあり、(I)はその下を占める。

(J)は(H)・(I)の左側に記されているが、その間は寄木の継ぎ目で区切られている。それに続く(K)は右側面裏となるが、(J)との間にはやはり寄木の継ぎ目がある。そして、(L)もまた継ぎ目を挟んでそれに続く。したがって、(D)から(L)までは、腹部を始めとして左廻りに胎内に位置していることになる。

二

これらの銘文の多くは人名もしくは法名と考えられるが、中にそうではない部分がある。一ケ所は(D)・(E)の部分で、般若波羅蜜多心経を書写したものであり、もう一ケ所は(H)・(I)の造立趣旨を記したところである。

前者は玄奘訳といわれる二六二字の経文を写した後、写経の理由が書いてある。已上以下四二字がそれで、「乾坤道泰、朝野民安、伽藍鎮静、禅道興隆、修行有慶、進道無魔」を願って、一字書写する毎に「焼香三拝」しながら行なったことが知られる。胎内に経文を記すことはそう珍しいことではなく、山梨県指定文化財の長坂町妙林寺蔵木造薬師如来坐像のように薬師瑠璃光如来本願功徳経が一面に墨書されている[2]例もある。

問題は後者である。(H)には一〇行にわたって造立趣旨が記されている。(I)のうち最初の三行は、住持比丘以下の字よりも少さく、意味の上でもつながらない。(G)の人名の書継ぎに接続するものと考えられる。(I)の残り五行は年紀と造立関係者と見ることができるので、この部分は上(H)に造立趣旨を記し、下(I)の後半)に造立関係者と年紀を配した一連の文章といえよう。

では、文章にしたがって若干の考察を加えて見たい。

當寺自革教院為禅刹以来已向四十季（當寺は教院を革めて禅刹と為して自り以来、已に四十季に向う）　教院とは禅院・律院の対で、仏教教学を専門に学ぶ僧が、経論を研究する寺のことをいい、特に真言宗・天台宗などの寺をさしていうことが多い[3]。ここでいう教院が具体的に何を指すかは不明であるが、無量寿仏（阿弥陀如来）を安置していたところからして浄土宗系の寺院であったと考えられる。夢窓疎石も、暦応二年（一三三九）西方教院を禅院に改めているが、この寺の仏殿にももと無量寿仏が安置されており[4]、墨書銘の「當寺」と全く同じ条件を備えていたことが知られる。この寺は京都西京区にある西芳寺のことで、この時寺名を西方寺→西芳寺と変えるとともに、浄土宗から臨済宗へと改められており[5]、教院→禅院への変更が浄土宗→臨済宗の変更を意味していることがわかることからしても、浄土宗系寺院から禅宗寺院に変わったと考えてよいのであろう。

教院から禅刹に変わったのが、墨書が書かれた時より四〇年前だということであるから、当寺が禅宗となったのは嘉慶元年（一三八七）から単純に四〇年を引いた一三四七年（貞和三年）頃ということになる。

佛殿本安無量壽佛立像（佛殿は本無量壽佛の立像を安んず）　無量壽佛は前述のように阿弥陀仏のことを指す。「本」とあるところから改宗以前からの本尊であったと考えてよいと思う。

近歳殿屋嬰欝攸之變□像僅雖存十之四五散失矣（近歳殿屋欝攸之變に嬰る、□像僅かに存すと雖も十之四五散失す）　欝攸之變というのは、『無極和尚傳』[6]に「當寺罹二欝攸之變一、灰燼之間」などとあるように、火災のことをいう。像の上の文字は「其」とあるが判読

できない。火災に遭って無量寿仏が焼損したことを記している。

嘉慶丁卯比丘周亮罄誠持疏普化比丘比丘尼優波塞優婆夷宰官婦女童男童女等名工於瑞雲菴造設　釋迦如来坐像以代彼立像（嘉慶丁卯(元)、比丘周亮誠を罄して疏を持し、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・宰官・婦女・童男・童女等を普化し、工を召きて瑞雲菴に於て釋迦如来坐像を造設し、以て彼の立像に代つ）　嘉慶丁卯は元年（一三八七）である。比丘周亮は(I)に出てくる幹縁比丘周亮と同一人物であることに間違いなかろうが、具体的な経歴はわからない。疏(疏)は、「箇条書にして陳述すること。また、その文書。注釈」(7)等の意味があるが、この場合は造像の趣意書の如きものか。疎を持った周亮が、比丘以下の僧俗男女子等を勧進して浄材を集め、工（仏師）を招いて瑞雲庵でこの釈迦如来像を造らせ、焼損した無量寿仏に代えて当寺に安置したというのである。工は当然(I)に見える大仏師増光のことであろうが、造像作業を行なったという瑞雲庵について他に史料がないのは残念である。

意在霊山一會儼然未散旷願能化所化坐立儼然全無古今之異法輪食輪運轉自如長絶魔外之障　ここは造立の願意を述べたところである。明確な読み方は記し難いが、この造像によって魔外（天魔と外道。ともに仏道をさまたげるもの）(8)の障害を長く絶つことを願っている。

随而盡記施者名字於體中以為當當来母之種子其甲乙不必論多寡大小貴賤老幼道俗男女随旷註先後誌之（随って、盡して施者の名字を體中に記し、以て當當来母の種子と為す。其の甲乙は、必ずしも多寡の大小を論ぜず、貴賤老幼道俗男女、註する所に随って先後に之を誌す）　この文により、胎内に記された多くの人名は施者の名字であることがわかる。「當當来母之種子」とは、今から未来にわたる永劫の菩提心（信仰）のことをいうのであろうか。

多要莫過一繙少不骨遺四字品目繁多不能枚擧仰冀昭鑑　ここの意味も明確には読みとれないが、品目が施物のことだとすると、施主名の他多くを書くことができないので、仏が照覧されたいという位の意か。

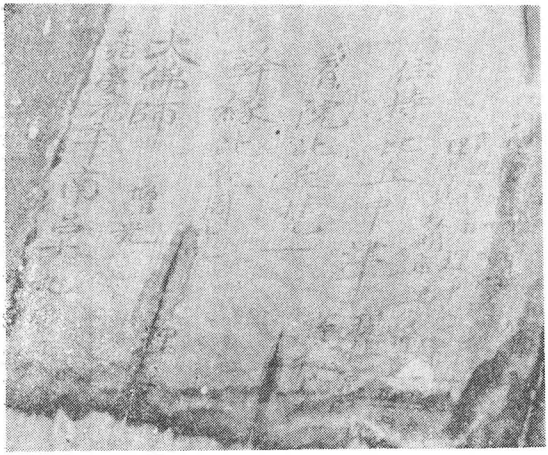
住持比丘中津（現住京師等持寺）　この比丘中津が当寺の住職である。京の等持寺は、中京区にあった臨済宗の寺で、足利尊氏によってその館内に創建され、永和三年（一三七七）十刹の首位となり、足利氏の菩提寺として栄えたが、応仁の乱後、等持院に合併されている。(9)『翊聖國師年譜』(10)をみると、至徳二年（一三八五）「十二月以鈞命董等持寺席、二十五日入寺」とあり、また明徳二年（一三九一）「是歳七月十六日、退等持寺移住等持院」とあって、翊聖国師＝絶海中津が至徳二年一二月から明徳二年七月まで五年七ケ月余にわたって等持寺に住んでいたことが知られる。この像が造られた嘉慶元年（一三八七）の時点では、絶海中津はまさしく「現住京師等持寺」であったわけである。したがって、比丘中津が絶海中津のことであることは間違いない。

絶海中津は、土佐の津野氏の出身で、一三歳の時京の天竜寺で夢窓疎石に師事して仏門に入り、後には足利義満、義持らの帰依をうけ、五山第一の相国寺に住持した。応永一二年（一四〇五）四月五日示寂、同一六年には仏智廣照国師、同二三年には浄印翊聖国師の称を贈られている。彼は単に臨済宗夢窓派の高僧というだけでなく、義堂周信と並んで日本の五山文学の作者の双璧といわれ、特に詩をよくしたことでも知られている。(11)

彼は甲斐国とも関係がある。前掲の年譜によると、

（康暦二年）秋以鈞選、開法甲斐州乾徳山恵林禅寺、九月初三日、就龜山雲居庵受請、十月八日入寺、凡在京師相州有名之英衲雲集、寺屋殆乎無所容、師不非之、孜々誘掖也、學徒参叩、禅宴餘暇、請而講法華棱嚴圓學等、緇素聽衆汎溢矣、蓋師旺化權輿于此矣

とあって、康暦二年（一三八〇）に恵林寺住持として甲斐へ入ったことがわかる。いつまで恵林寺にいたかはわからないが、永徳三年（一三八三）には京に創立された鹿苑院に住しているので、少なくともそれ以前ということになり、わずか三年足らずしか甲州にいなかったことになるが、その間に京や相州（鎌倉）の学徒（僧）が彼のもとに集まり、寺の建物から溢れんばかりだったという。他国からも集まるほどであるから、甲州の僧俗に対しても大きな影響を与えたものと考えられる。しかし、中津が甲州で関係をもった寺院としては恵林寺の名しか知られていない。



すると、彼が住持した「當寺」とは恵林寺のことなのであろうか。しかし、恵林寺は教院から改宗したという歴史を刻んでいない。勝善寺について『甲斐国志』をみると、「臨済宗京都妙心寺末黒印五百四十五坪永禄甲子寺領八貫三百八十六文武田家ノ文書ヲ蔵ム本尊釈迦、開山夢窓国師、末二ケ寺」とあるだけで、『社記・寺記』にもこれ以上の記述はない。したがって、本来勝善寺のものとしてこの像が造顕されたものかどうか断定できないことになるが、現に勝善寺に安置されていること、開山夢窓国師とするところからその高弟絶海中津が関わっていてもおかしくないこと、本尊の移動についての伝承が全くないこと等を考慮すれば、始めから勝善寺にあったものと考えてよいように思われる。

また、住持と現住の記述をどう考えるかという問題もある。一つの考え方としては、発願当時に中津が住持をしており、完成した嘉慶元年には等持寺現住だったという時点の異なる事実を並べて書いたとするものである。しかし、それであれば詳しい趣意、経過を書いた㋒の文に何らかの形でてきてもいいのではないか。嘉慶元年になってから周亮が造像を目的として勧進を始めたという㋒の記述に矛盾することになる。

もう一つの考え方は、ここでいう住持とは勧請開山の如きもの、いわば今でいう兼務住職のような形態を示すもので、名目上の住持ではないかということである。それであれば、住持と現住が異なっていても一向差支えない。ただし、当時そうした形での住持が存在したのかどうかは検討しなければならないが。

看院比丘梵一幹縁比丘周亮　周亮は㋒にも出てくる人物で、自ら疎

をもって勧進しており、この造像計画の実質的中心人物である。(J)の冒頭に「中津中渕梵一周亮昌□(勇カ)……」とあるが、名前からして造像に関わった僧たちの書上げ部分と考えられる。絶海中津を始めとするこれらの人名は、中津→中渕→梵一→周亮とその法灯の序列に従って記述されているのではないか。恵林寺へ入った中津のもとへは多くの僧侶が集まったわけであるが、梵一・周亮もまたその一人と考えてよいと思う。とすれば、看院比丘の称も、読んで字の如く院を看る比丘、すなわち寺院を自ら管理する実質上の住持を意味しており、師の中津を名目上の住持として迎えたと解することができよう。前述の住持・現住問題についても、後者の理解が正しいとする一つの論拠となしうると思う。

また、幹縁比丘は勧縁比丘であり、「有縁の人に勧めて、浄材を寺院に寄付させる」[12]という実行責任者を意味するものと思う。住持―看院比丘―幹縁比丘の関係は、中津―梵一―周亮という師弟関係を背景にしたものと理解できる。

大仏師増光　増光の作品は、甲西町宮沢の深向院にもある。同寺の本尊である釈迦如来坐像で、高さ二三・五センチメートルの小像であるが、「至徳二年十一月　日　大仏師越後阿闍梨増光造」の胎内銘をもつ。[13]勝善寺の像より二年前に造られたものである。越後阿闍梨を称していることからすると、越後国出身の仏師であろう。

理晋　肩書がなく、いかなる人物かはわからない。しかし、通常こうした墨書銘に登場するのは、他に願主や筆者位しかないが、記された位置からして、ここでは筆者であろうと推定しておきたい。

嘉慶元季南呂十九日　南呂は八月のことである。周亮の勧進が始まったのも嘉慶元年に入ってからであるから、造像事業は順調に進行したらしい。

おわりに

以上、銘文の概要と若干の解説とを行なったが、この銘文はいろいろな意味で注目される内容を含んでいるといえる。そのいくつかをあげれば、まず絶海中津という臨済宗の高僧、五山文学の巨頭に関する記述を含んでいることである。中津と甲斐国との繋がりは年譜にある恵林寺入山だけであったが、この銘で具体的に残した足跡の一つが確認されたことになる。次に、禅宗の地方への教線拡大のあり方についてである。教院→禅刹といった既存寺院の再興、改宗といったケースが意外に多く、この場合もその一事例として今後の検討の材料となろう。

また、地方仏師の活躍の実例としてもおもしろい。越後阿闍梨増光は、二年足らずの間に深向院と勝善寺と二軀の仏像を手がけており、今後さらに発見される可能性もある。

この他、造像に際しての勧進のあり方や施者の範囲、また造像にこめられる人々の願い等様々な観点からのアプローチが可能であろう。さらには、列記される人名の中にも注目されるものがある。例えば、(K)の冒頭にみえる「法光頼武満春」である。法光は武田信成の法名で、満春はその子、頼武は満春の子である。[14]法光（信成）―満春―頼武の系譜となる。後の二人は布施氏を称しており、[15]勝善寺のある後屋とはそう遠くない田富町布施が本拠だったといい、[16]信成も後屋に隣接する古上条の雪窓院を祈願所としたとあって、共にこの地域に関係が深い。この部分が前記三人のこととすれば、勝善寺の本尊造顕に絶海中津が関わっているのも納得がいくような気がす

る。このような比定は他にも可能なものがあると思われる。今後の各方面からの検討を期待したい。

注

(1) 実際には判読を放棄した(G)の三行分、(F)の一部、(J)の一部などがあり、これらを加えると少なくともあと一一〇字位は増えるであろう。
(2) 『県指定山梨県の文化財改訂第一集』。
(3) 中村元『佛教語大辞典』。
(4) 『夢牕國師年譜』(『続群書類従』第九輯下)。
(5) 『京都市の地名』(日本歴史地名大系27)。
(6) 『続群書類従』第九輯下所収。
(7) 『広辞苑』。
(8) 注(3)に同じ。
(9) 注(5)に同じ。
(10) 注(6)に同じ。
(11) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成』の「絶海中津」の項を略記した。
(12) 注(7)に同じ。
(13) 注(2)に同じ。
(14) 『甲斐国志』巻九四・巻九八。
(15) 同前巻九八。
(16) 同前巻七九。

(秋山)

付記

前後三回にわたる勝善寺仏像調査では、小沢大洪住職をはじめ、檀家を代表されて、後藤宗平・萩原利・功刀勉・渡辺武則の各氏に立ち会っていただき、多々御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

(事務局)